

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

February 2018 vol.27



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「モダン・アートに出会う5つの扉 —和歌山県立近代美術館名品展」

作品に宿るメッセージ —彼らが生きた時代

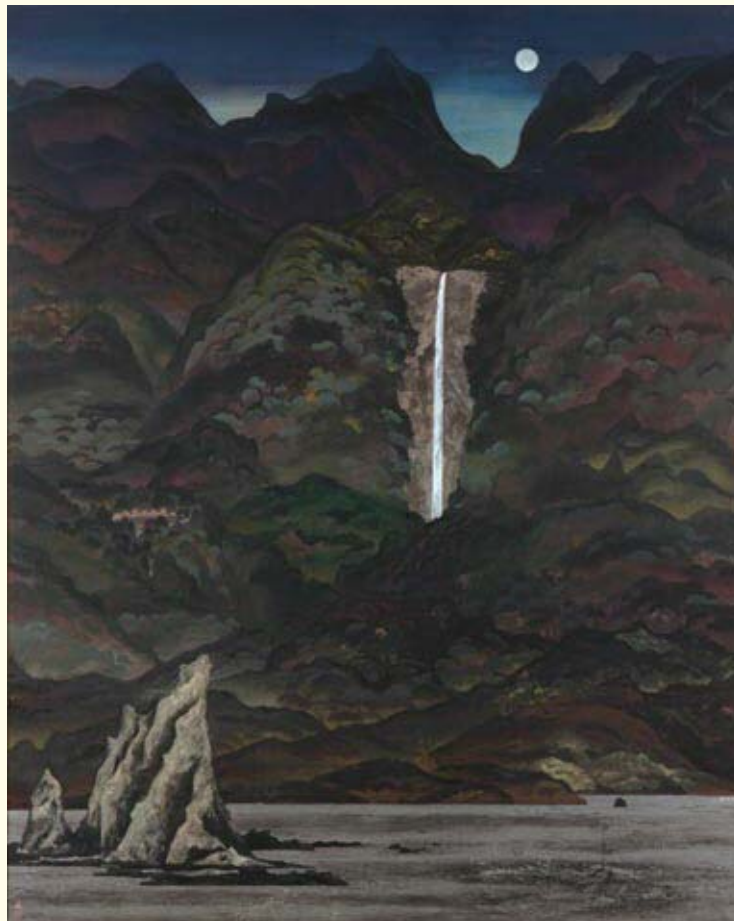
企画展「ゆかた・浴衣・YUKATA」

ゆかた 日常着にみる美意識

報告「新事業、ミュージアム：Museum×Theater スタート！」

グラントワならではの体験、グラントワにしか咲かない花

27



裨田一穂《幻想那智》1979年 和歌山県立近代美術館蔵

「モダン・アートに出会う5つの扉 —和歌山県立近代美術館名品展」

2018年4月21日(土)～6月17日(日)

休館日:火曜日(ただし5月1日は開館) 開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)



A



B



C

A. 佐伯祐三《レ・ジュ・ド・ノエル》1925年

B. 石垣栄太郎《キューバ島の反乱》1933年

C. 田中恭吉《ひそめるもの。(公刊『月映』II)》1914年
展示期間:4月21日～5月21日

いずれも和歌山県立近代美術館蔵

作品に宿るメッセージ —彼らが生きた時代

「モダン・アート」とはそもそも何なのか。わかっているような、いまひとつモヤっとしてよくわからないような、そんな言葉のひとつかもしれない。言葉の意味は「近代美術と現代美術」。このうち現代美術は「コンテンポラリー・アート」と訳して近代と区別する場合があるが、おおむね「モダン・アート」は、20世紀以降に著しく変化を遂げた新傾向の美術をさす。今回の展覧会は日本国内の美術を対象としているので、「日本の近現代美術」という意味になる。この近代と現代の境界は、第二次世界大戦をひとつの区切りに分かれる。このように便宜上は時代を分けて言い表すが、今もこの「現代」は進行形であり、実際には分野によって、あるいは国内外によって時代区分の解釈は様々で、境界自体があいまいなものと言えるだろう。美術の分野では、この20世紀以降の急速な社会の発展と変革を背景に、新しい思潮や傾向が次々に誕生し、途絶え、あるいは一部残しながら継がれるサイクルがあり、今に繋がっている。そしてどの時代も個々の作品には、作家が生きた時代背景が色濃く反映し、彼らの時代の空気を伝えてくれる。

この作家の目を通した世界は非常に豊かな感性で編まれていて、見る側の受け取り方で幾重にも膨らみ、深化する。今回の展

覧会では、そうした様々な時代との接点、初めて見る作品や作家との出会いをテーマにした。和歌山県立近代美術館は国内でも「モダン・アート」の屈指のコレクションを収蔵していることで知られるが、島根からは遠く、まとまって見られる機会は少ない。普段知る機会のない作家やその作品を目の当たりにすることで、未知の感性に触れ、是非、美術の面白さの深みにはまっていたらと思う。

今回は、展覧会の広報メイン画像にもなっている佐伯祐三《レ・ジュ・ド・ノエル》(図A)を紹介したい。佐伯は30歳という短い生涯で、二度のフランス滞在を経て、独自の油絵を追求した、言わば日本近代美術を代表する洋画家の一人である。この作品は最初の滞仏時に描いた作品で、モンマルトル駅のすぐ南、パリ15区のシャトー通りにアトリエを借り、その街角を描いたものである。「レ・ジュ・ド・ノエル」とは「クリスマスの楽しみ亭」という意味の酒場で、2階はホテルを兼ねていた。佐伯はこの頃、人の多い表通りではなく、古く粗末な建物が多く残り、場末の寂寥感漂う裏街を好んで描いた。店を真正面から捉え、弁柄色の屋根と壁、深緑色の酒場の出入口の色の対比が美しい。見ていただきたいのはこの独特の色味と、佐伯の絵に宿る「硬質感」である。これ

は正直、実物を見ないとわからない。見たままではない、佐伯のフィルターを通したパリの一角。寂れた街角に画架を立てて、早描きで描いたという佐伯の息遣いが聞こえきそうである。

ほかにも見どころとなる作品がたくさんある。大画面の作品ではアメリカを拠点に活動した洋画家、石垣栄太郎の大作は見逃せない。《キューバ島の反乱》(図B)は1933年、キューバ共和国で起こったマチャド政権と市民との衝突をテーマにしたものだが、大きな画面に権力との闘争が力強く描かれ、そのメッセージ性の強さに圧倒される。また小さな作品にも、作家の魂がそのまま宿ったような、心をぎゅっと鷲掴みにされる作品がある。田中恭吉の《ひそめるもの。》(図C)は、恩地孝四郎と藤森静雄の三人で刊行した、詩と版画の雑誌『月映』に収録した木版画である。病と闘いながら制作を続け、23歳の若さで亡くなった田中恭吉の瑞々しくもせつない世界観が凝縮している。石垣と田中はともに和歌山県出身であるが、ほかにも同県出身者には魅力の作家が多く揃っている。和歌山県立近代美術館の至宝の作品群を是非この機会に堪能していただきたい。

(左近充直美 当館専門学芸員)

「ゆかた・浴衣・YUKATA」

2018年7月14日(土)～9月3日(月)

休館日: 火曜日(ただし8月14日は開館) 開館時間: 午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

企
画
展



図1



図2



図3

- 図1.《網に魚介模様浴衣》
江戸時代後期 松坂屋コレクション
一般財団法人J.フロントリテイリング史料館 資料提供
- 図2.《日本三景模様浴衣》
江戸時代・19世紀前半 松坂屋コレクション
一般財団法人J.フロントリテイリング史料館 資料提供
- 図3. 主婦の友浴衣 当選浴衣地発表即売展
『主婦の友社の五十年』114頁より転載

ゆかた 日常着にみる美意識

ゆかたは、きものが日常的にはほぼ着られなくなった現在においても、着る人を増やしている和服である。きもの場合、ルールに則って「正しく」着る事が求められるいっぽう、ゆかたはそうした規範がきものに比べ緩やかで、気軽に着られるように感じられることから、今も年齢を問わず受け入れられているのだろう。実際、暑い盛りに行われる花火大会や夏祭り際には、小さい子どもや若い女性たちを中心にゆかたが着られているのを目にする。

ゆかたとは、浴後または夏に着る木綿の単ひとのきものを指す。中世の上流社会では入浴時にまとった麻あしの単ひとのきものを湯帷子ゆかたびろと呼んだが、この略語がゆかたである。近世には庶民の浴後のくつろぎ着として用いられるようになった。同じ頃、近世以前は貴重品であった木綿が国内で栽培できるようになり、普及がすすむと、ゆかたにも木綿が用いられた。ゆかたは、和服の中でもカジュアルなジャンルとして見られることが多かったことから、織りや刺しゅう、染めなどで多彩な装飾をほどこしたきものに比べ、これまで展覧会としてまとまって紹介されることは少なかった。そのゆかたに焦点をあてる本展は、江戸から昭和初期までを中心に展示し、その文化史を技法と図案のデザインから読み解く内容である。

ゆかたといえば、藍と白のコントラストが鮮

やかなシンプルな図案のものがまずは思い浮かぶ。《網に魚介模様浴衣》(図1)は、全体に網の模様をほどこし、大胆に海老や蛸などを配した「ゆかたらしい」作例である。くつろぎ着として着られるゆかたであっても、水辺を想起させる涼しげなモチーフを、「いき」なデザインにまとめあげている1点といえよう。

他方、《日本三景模様浴衣》(図2)は、松島、天橋立、巖島神社という日本の景勝地をそれと分かるように描き込むという絵画的な表現がみとれる作品である。18世紀半ば以降、町人階級に旅行ブームがおこり、またそれにともない名所図会という、各地の名所旧跡などの由来や物産などを書き記した絵入りの地誌が数多く刊行された。人々は旅行や名所への憧れを募らせるようになり、同時代の、なかでも町人階級のきものには、さまざまな名所を友禅染で絵画のように表した図案がみられるようになった。江戸時代後期、19世紀のものとする本品からも、当時の旅行ブームを読みとることができる。このように、ゆかたの図案には、夏向きなものばかりでなく、時代の社会情勢を映し出すモチーフも見いだすことができる。

明治に入ると、社会情勢は大きく変化した。服装においては洋装が導入されたものの、それは急にすすんだわけではない。洋

装化はまず男性から進み、大正中期以降から子ども、そして大正末期ごろから女性へと進展していったとされる。つまり、多くの人たちは明治以降も依然和服を着て生活していたわけだ。

ここでは、ゆかたに関して雑誌『主婦の友』が大正末に行なった企画を紹介したい。同誌は、大正14年「浴衣地の図案を募集」し、2,700点を超える作品の応募があった(図3)。小林古径、山本鼎、与謝野晶子が審査し、選ばれた案を松坂屋呉服店に依頼して製品としたところ注文が殺到するほどの人気で、「主婦の友浴衣」は「市販のものとは比較にならぬほど優秀だった」とある^{※1}。有力女性雑誌と著名なアーティスト、そして読者とのコラボレーション企画に大きな反響があったということは、実際どれほど流行ったのか検証が必要ではあるものの、大正末にもゆかたは依然女性の日常着であり、流行を映す媒体のひとつであったといえることができるだろう。

展覧会では、ゆかたというカジュアルな日常着にこそ見いだせる美意識とその変遷を、じっくりと味わいたい。

※1 『主婦の友社の五十年』1967年、主婦の友社、114-115頁

グラントワならではの体験、 グラントワにしか咲かない花

石見美術館といわみ芸術劇場が一つ屋根の下に同居する「グラントワ」では、両者の融合を示す「Museum×Theater：ミュージア」と題した事業を、平成29年度から開始した。ここでは学芸員の立場から、4つの企画展の関連プログラムとして実施した初年度の4つの企画を振り返ってみたい。

春の企画展「キャプテン・クック探検航海と『バンクス花譜集』」は、クックの航海に同行して植物を採集したジョセフ・バンクス の指揮で制作した植物図譜の展覧会だった。ここでは精緻な植物画に加え、オセアニアやアジアの寄港地の生活や信仰にまつわる品々や、18世紀イギリスの航海術や学術的探究心を示す資料を展示し、作品のバックグラウンドを多面的に紹介した。これにさらに音楽という要素を付加したのが、ミュージア vol.1「音楽でめぐる探検航海」4回連続コンサートである。第1回はオーストラリアの先住民アボリジニの楽器「ディジュリッドゥ」、第2回は星を頼りにした当時の航海術にちなみ「星の音楽」と題したピアノコンサート、第3回はクックやバンクスの故郷イギリスの古楽器の演奏を行なった。インドネシアの楽器「ガムラン」が登場した第4回「祈りと祭の音楽」には影絵や木馬を使っ

たパフォーマンスも登場し、まるで異国の祭が出現したかのような賑わいとなった。

夏には企画展「没後70年 北野恒富展」に合わせ、恒富が愛し、描いた大阪の花街や芸舞妓の世界を垣間見る「お座敷遊び体験 花街ってどんなところ？」を開催した。大阪、南地のお茶屋「たに川」の若主人、谷川恵さんから花街の文化や芸妓の装いについて説明を受けた後、芸妓の多佳さんの歌と三味線で、恒富の絵にちなんだ曲が演奏された。最後は観客も舞台上がり、お座敷で楽しまれてきた歌や踊りを盛り込んだゲームを体験した。

音楽や踊りをライブで味わい、楽器や衣装なども間近で見ることができたこれら2つのミュージアは、生きた異文化体験（もはや花街だって「異文化」だ）をプラスして美術館の展示を多角化、深化させる手だてとなった。

秋の企画展「石見の戦国武将―戦乱と交易の中世」では、各地の芸能を調査しながら独自の舞台を制作する東保光さんの作、演出により、益田氏ら中世石見の武将たちのまさに「戦乱と交易」をテーマとした、新しい芸能の創作に挑んだ。地域の人々の協力を得て史跡や方言の取材も行なった結果、和・洋・韓、総勢9名のパフォー

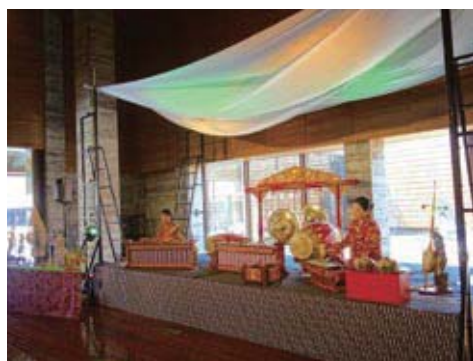
マーによる、音楽と語りと舞踊が交錯する一大叙事詩「海山のあいだ～石見益田氏の祈り」が誕生した。大ホールホワイエを会場とし、壁面や階段を山や神殿に見立てた空間構成も印象的だった。

企画展「エドワード・ゴッリーの優雅な秘密」に合わせた「エドワード・ゴッリーの優雅なはずら」は、アメリカの絵本作家、ゴッリーがバレエ好きだったことにちなんだ、バレエと朗読と音楽の公演である。津和野在住のバレリーナ、田中美礼さんに演出を依頼し、打ち合わせを重ねながらゴッリーの2つの絵本を題材としたパフォーマンスを制作した。大ホールのステージ上に舞台と観客席の両方を設置し、通常の客席を背景に演技するという試みも好評だった。

一般的には美術館にとって展覧会の開催がゴールとなるが、この2つのミュージアでは、展覧会を種、グラントワという場を土として、アーティストとともにもう一つの花を咲かせることができた。

今後は企画展にこだわらず、劇場と連携できる機会をとらえて様々な企画に挑戦したい。何が飛び出すか分からないミュージアに、乞うご期待。

(川西由里 当館専門学芸員)



ミュージア vol.1
「音楽でめぐる探検航海」第4回「祈りと祭の音楽」



ミュージア vol.3
「よみがえる戦国の宴」「海山のあいだ～石見益田氏の祈り」
山の神と衆人たち、階段を祭壇に見立てる



ミュージア vol.4
「エドワード・ゴッリーの優雅なはずら」
エドワード・ゴッリー「華々しき鼻血」より
「くらとすなちでおどる」